



令和5年度 8月人権一口講座



人権一口講座

「あんちゃん・尊い命」

実家の仏間に祖父母の写真と共に、茶色に変色した若者の写真がある。私が幼い頃は気付きもしなかった。無関心だったからだ。

しかし、分掌として「人権教育・生涯教育」担当となり、自主研修することが多くなった。自主研修で、鹿屋航空基地資料館を訪問したことがあった。

出かけるその日、玄関に向かう私に父が話しかけてきた。

「今までは詳しく話さなかったが、あの写真はいとこのあんちゃんの写真だ。この家であんちゃんも育ってきたから、俺の一番の友達で理解者だった。けれど春先だったな、飛行機に乗りアメリカ力艦船に向かって「特攻」し亡くなったんだ。」

「あんちゃんが特攻する前日に、家の上を大きく旋回する飛行機を見たんだ。きっとあれはあんちゃんがお別れを言いに来たんだと俺は思っている。だから、あの時俺は屋根の家に上って大きく手を振り「あんちゃん、あんちゃん」と呼んだんだ。」と私に静かに語った。

資料館に入ってみると、入

口付近にゼロ戦が飾ってあった。

「あー、父さんが言っていたあんちゃんはこんなのに乗っていたのか。けれど、これでぶつかったとしてもアメリカ艦船はびくともしないのでは」と、戦争時の日本軍の闘いについて考えた。外観だけで、現代の最新式・重装備の飛行機等と比べると雲泥の差に見えた。

静寂の中、建物の奥へと歩みを進める。数多くの若者の写真を見つけた。出身県と名前が記されている。「もしかしたらあるのかな」と目を皿のようにして一人一人の名前を追った。

「違う・違う」「違う…」「あった!」「熊本県…」…「あんちゃんの顔だ!けれど、ちょっと印象が違った。少し笑った顔だった。そして穏やかにも見えた。」

「父さん、あんちゃんの写真があったよ。家にある写真と顔が違って見えたよ。なんか笑っているようにも見えた!」と伝えると、「自分は辛くて行ってないんだ。行ってくれてよかったよ。笑っていた写真か、そうか。ありがとう。」と、父の目から涙がこぼれた。

昭和20年8月15日「終戦」を迎えた。そう、あれから78年が経つ。私の父は、今でもあんちゃんの写真を見ては思い起こして話しかけている。

「あんちゃん、あの時は楽しかったよな。あんちゃんに逢いたいよ。」と言いながら背中が震える。泣いている。

私はそんな父の姿を見て思った。「長い年月が経っても人はその姿を追想し、忘れはしないのだ。」
私はあんちゃんを通じ、戦争によって失われた数多くの尊い命についても深く考えたのであった。

「熊本市かれあい文化センター広報紙」かけはし「令和5年度8月号より」

短いメッセージ

百人いれば 百通り 同じ人なんていなくて
一人一人違う それって とっても 面白い

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会 人権カレンダー- 五霊中学校2年 中村 華さん (2022年度の作品より)